

1830年12月 ^{そのぎ}其扇がシーボルトに送った蘭文手紙

宮崎 克則

はじめに

1830年3月に帰国途中のバタヴィア（現インドネシアのジャカルタ）から手紙を送ったシーボルト（34歳）に対し、23歳の其扇（そのぎ、楠本たき：1807～69年）は12月に返事を送った。本稿は、そのときのオランダ語手紙について検討する。

筆者は、2018年5月、（オランダ）ライデン大学大学院生のアーフケ・ファン＝エーヴァイク（Aafke van Ewijk）さんから、同大図書館蔵の「ホフマン資料」（No: BPL2186 M8）のなかに、1830年12月付、其扇がシーボルトへ送った最初の和文手紙があることを教えてもらった。アーフケさんは、イギリスのケンブリッジ大学で開かれた「古文書」講座に参加したことがあり、女性特有の「まいらせ候」の「くずし字」を読んだことがあった。彼女は、この和文手紙が女性の手紙であること、さらに文中の「い称」を「いね」と読むことができた。在外研究でライデン大学に所属した筆者が、自己紹介で「シーボルトのことを研究しています」と言ったから、彼女は快く教えてくれた。日本近代の文化史を専門とする彼女にとって、其扇の手紙は研究対象でなかったが、2017年12月にライデン大学で開かれたオランダ日本学会に参加し、その際に図書館にある日本関係資料が展示され、たまたま見ることができたのである。

ホフマン（ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン Johan Joseph Hoffmann 1805～78年）は、シーボルトの助手を努め、後にライデン大学日本学科初代教授となっており、彼に関する先行研究^①はあるが、これまで其扇の手紙の存在について指摘されることはなかった。手紙の入っているファイルには、オランダ語で「日本語の

文字の例」と書かれているに過ぎない。ホフマンに宛てられた和文手紙とともに、ファイルされた其扇の手紙は、継ぎ目が剥がれて4点に分かれており、彼女の手紙として認識されていなかったのである。

アーフケさんとともに再調査し、欠損のない約3.4mの手紙であること、帰国したシーボルトに其扇が送った最初の国際郵便であることが分かった。成果は彼女の名前で『鳴滝紀要』29号に掲載しており²⁾、ライデン大学図書館では画像をネット上に公開している (<https://digitalcollections.universiteitleid.nl/islandora/object/item:2010675>)。

本稿の課題は、和文手紙とともに送られたオランダ語で書かれた蘭文手紙を検討することである。シーボルトは「くずし字」で書かれた手紙を読むことできない。だから、其扇はシーボルト門人の高良斎に翻訳を依頼して一緒に送った。現在、和文手紙は現存するが、蘭文手紙は写真のみが残る。2つの手紙を比較検討し、どのように翻訳されたのか、何がシーボルトに伝わったのかを明らかにする。

1. 和文手紙と蘭文手紙の伝来

和文手紙はライデン大学図書館の「ホフマン資料」にあり、蘭文手紙は東洋文庫にフォトシュタット版の写真がある。其扇が送った最初の手紙は伝来を異にしている。

和文手紙の日付は(文政13=天保1)「寅十一月十一日」=1830年12月25日。蘭文手紙の日付は「dan 15 van japansche 11 maand」(日本暦11月15日)=1830年12月29日であり、4日後に作成されている。この年、長崎に入港したオランダ船2隻(8月2日入港のネーデルランド・コーニンヒン号、8月8日入港のアンナ・カタリーナ号)は、1831年1月1日に出港³⁾しているから、2つの手紙はどちらかの船に乗せられた。そして、オランダによるアジア貿易の基地があったインドネシアのバタヴィアを經由して、1831年夏ころ、ライデンにいたシーボルトの手許に届いた。

その後、和文手紙はホフマンに渡った。ホフマンとシーボルトの出会い、1830年7月のことであり、たまたまの出来事であった。国外追放となったシーボルトは、同年7月7日、バタヴィアを経由してオランダ南部のフリッシンゲン港に着いたが、同日夜には再び乗船し、翌朝、アントワープに着いた⁽⁴⁾。7月17日、アントワープのホテルには、売り出し中のオペラ歌手、ホフマンも泊まっていた。ホフマンは、ある人物がドイツ語にオランダ語やフランス語、マレー語まで交えて得意げに旅行談を話しているのを聞いた。彼は、その人物の話し方から、自分と同郷（ドイツ ヴェルツブルク）出身だと分かり、数年間を日本で過ごしたことも分かって、日本に興味を持った。この時、ホフマンは26歳、すでに5年間ほどオペラ歌手として修行してきたが、シーボルトに従ってライデンに赴き、日本研究を志すことになった。

ホフマンはシーボルトから初歩的な日本語の手ほどきを受け、彼がバタヴィアで雇い連れてきた中国人郭成章に中国語を習った。そして、日本人が中国語を習うために作った参考書を逆の方向に使うって日本語を学び始めた（例えば、シーボルトが持ち帰った『和漢音釈書言字考節用集』などの漢和辞書）⁽⁵⁾。ホフマンと郭はシーボルトの家に住み⁽⁶⁾、自費出版の『NIPPON』の制作を手伝った。そしてホフマンは、1855年にライデン大学日本学科初代教授となり、1868年には文法書の『日本文典』を出版した⁽⁷⁾。「ホフマン資料」として伝来する其扇の和文手紙は、これを読めなかったシーボルトが、日本語「教材」としてホフマンに与えたものだろうか。

一方の蘭文手紙は、シーボルトの子孫家に伝えられた。1927年、この手紙をベルリンにあった日本学会（日本研究所 Japaninstitut 1926～45年）が購入した。購入先は、シーボルトの孫娘エアハルト男爵夫人エーリカ（Erika Freifrau von Erhard-Siebold）であり、関係資料を一括購入した。それらの資料は日本へ貸し出され、白黒反転のフォトシュタット版複製が作られた。ドイツに返された原史料は、第2次世界大戦後にアメリカとソ連に没収され、今は返却されているが、変遷過程で紛失した資料は少なくない⁽⁸⁾。現在、蘭文手紙は東洋文庫にフォトシュタット版のみが残る。

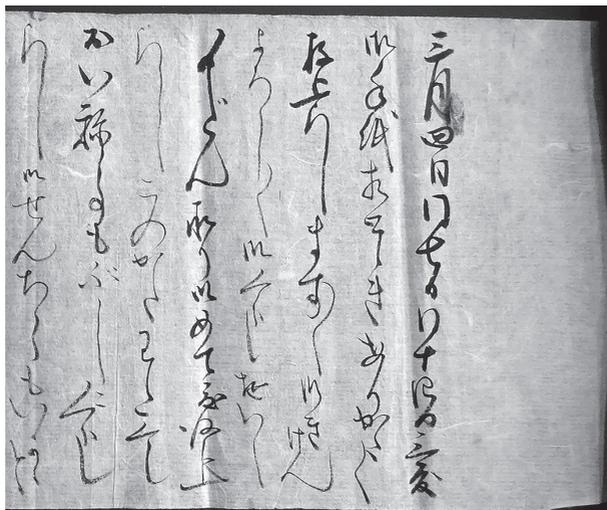
アーフケさんの発見によって、別々に伝来した其扇の手紙は、ようやく一緒に研究できるようになった。

2. 和文手紙の概要

和文手紙の画像、翻刻、現代語訳はすでに『鳴滝紀要』29号に載せたから、概要のみを記す。この手紙は其扇の直筆でない。彼女は無筆であり、近くにいる人物に代筆してもらっている。そのことは、彼女が送った数通の手紙を見ると明らかであり、筆跡はそれぞれに異なる。手紙の書き出しは、〔図1〕のように、

三月四日、同七日、同十四日、三度御手紙相とゞき、ありがたく存上まいらせ候（後略）

〔図1〕 1830年12月の和文手紙の書き出し



（後略）

（ライデン大学図書館蔵）

とある。1830年3月、帰国途中のシーボルトは、バタヴィアから3通の手紙（3月4日付、3月7日付、3月14日付）を其扇に送った（オランダ語で書かれた3通の手紙、和訳した手紙については拙稿⁹⁾を参照していただきたい）。其扇の手紙はこれへの返事であり、彼女の想いが込められている。

御てかみをあなたさまとそんじ、日々とわするゝひまとてハ御ぎなく候、そのうへおいね事、なに事もわかりい、日々とあなたさまの事ばかり、たつね申候て、なか〜わたくしにもおもひをこがしまいらせ候

手紙をシーボルトと思って忘れることはないこと、1827（文政10）年5月に生まれた「いね」は、3歳になって物事が分かるようになり、父親シーボルトのことを尋ね、其扇はシーボルトへの「想いを焦がし」ている、という内容である。このように想いのこもった手紙の翻訳は容易でなからう。

其扇は手紙とともに記念品を贈った。それは「はなたはこ入」（鼻煙草入れ＝嗅ぎ煙草入れ）であった。鼻から吸い込む煙草は19世紀のオランダにはあったが、現在は無くなってしまった。2個の煙草入れのうち、一つには「いね」の絵があり、「生うつし」だという。これはシーボルトの母へのプレゼントであった。もう一つの煙草入れには、蓋の表に其扇、裏に「いね」が描かれ、シーボルトへのプレゼントであった。青貝細工で作られた煙草入れについて、

これをわたくし・おいねとおぼしめし、あさゆふ、御らん下され度御たのミ申上まいらせ候

とあり、「朝夕ながめて自分たちを思い出して欲しい」とある。確かにシーボルトは、其扇と「いね」が描かれた煙草入れを大事にしていた、と思われる。その理由は、贈られた煙草入れの実物が30年後の再来日時（1859～62年）にシーボルトから返却され、今は長崎のシーボルト記念館に国指定重要文化財として保管されており、保存状態は良いからである。返却の経緯については拙稿¹⁰⁾に

記した。

其扇は手紙のなかで、シーボルトが贈ったプレゼントに感謝するとともに、大事な生活費の受け取りを報告している。

かず〜御おくりもの下され、御ありかたくうけとりまいらせ候、だん〜御こゝろに御かけ下され候て、ゑんごく御おり下され、御をんのほど、いつしかわすれ申さず候、銀十メ目もたしかにうけとり申候、ま事ニ〜うミ・やまかけへだゝり候所、かよふになし下され候事、一しやうわすれ不申候、このだんあつく御礼申上候

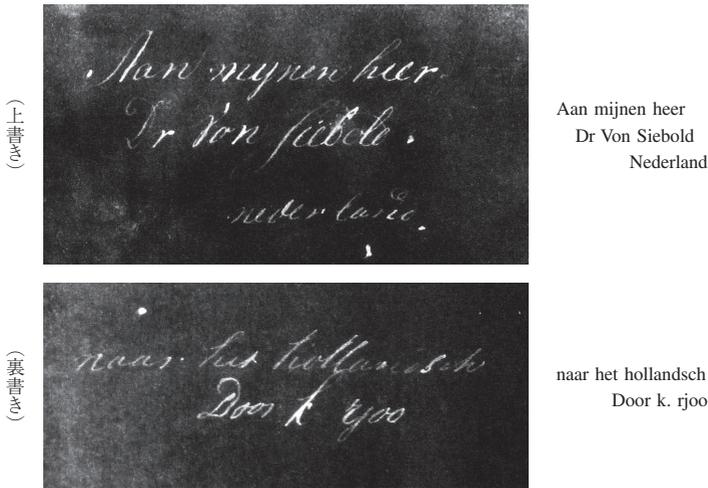
「ゑんごく」(遠国)からの御恩は、「一しやう」(一生)忘れないとある。シーボルトが其扇・「いね」の生活費として贈った「銀十メ目」(10貫目)は、現在の価値にすると約1670万円。3月のシーボルト手紙に1000テール(銀10貫目)の送付、「これを運用して、利息でくらせ」(3月4日付)とか、「無駄遣いしないように」(3月14日付)とあった⁽¹¹⁾。「テール」(Tail・Teil)とは、日本とオランダの貿易取引のための架空の換算単位である。

手紙には、「をちどのかた」(叔父殿方)で暮らしているから心配しないように、また、シーボルトが「御たつしや」(御達者)に暮らすことを祈っているとあり、同じ内容の箇所が何度もある。この繰り返しの多さが、和文手紙は其扇の口述筆記で記されたことを裏付けている。

3. 蘭文手紙の概要

ベルリンの日本学会所蔵資料が日本へ貸し出されたことを契機として、国内でシーボルト研究が興り、研究成果が刊行された。日独文化協会編『シーボルト研究』は、1938(昭和13)年に岩波書店から刊行され、シーボルト門人が提出したオランダ語論文の翻訳をはじめ、第一線で活躍していた研究者たちによる700頁を越す研究論文を載せている。また同じく日独文化協会編『シーボルト

〔図2〕 1830年12月の蘭文手紙包紙



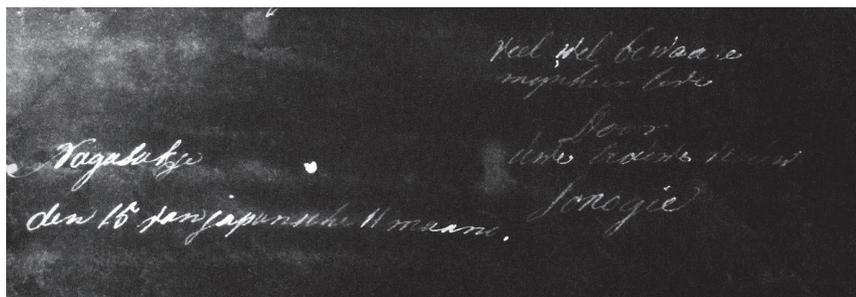
(東洋文庫蔵)

ト関係書翰集』も出た⁽¹²⁾。これには、国内に残るシーボルトからの手紙の他に、ベルリン日本学会が所蔵するシーボルト宛の手紙が掲載され、高良齋が翻訳した1830年蘭文手紙も載っている。

ただし大きな間違いがある。東洋文庫に残るフォトシュタット版を見ると、蘭文手紙の前半8割は『シーボルト関係書翰集』55号の手紙として、後半2割は57号の手紙として紹介されている。別の手紙としたから、全く意味が理解できなくなっている（この他にも、1831年を1830年と読み間違った54号の其扇手紙もある）。フォトシュタット版をもとに再編集した翻刻と翻訳文は後掲する。さらにまた、手紙の包紙も写されていたが、それは省略されている。まず包紙の上書きと裏書きを紹介する。〔図2〕のフォトシュタット版から、高良齋が翻訳したことは明確である。上書きに「私の師 シーボルト博士 オランダ」とあり、裏書きに「オランダ語訳 高良齋より」とある。

本文は2枚あり（後掲する）、最後の署名・日付の部分は〔図3〕の通りである。「お体を大切にしてください」「あなたの忠実なる妻 其扇」とあり、「長

【図3】1830年12月の蘭文手紙署名・日付



(東洋文庫蔵)

Nagasaki
den 15 van japansche 11 maand

veel wel bewaare
mijnheer leve
Door
uwe trouwe vrouw
Sonogie

崎 日本暦11月15日」(西暦1830年12月29日)とある。

和文手紙の日付は(和暦)11月11日であり、4日後の15日、高良斎によって翻訳された蘭文手紙の本文書き出しは、

Ik ben zeer gerust, nadat ik dit jaar den 7 maand van heer de villeneve uwEl mij geschrevene drie brieven ontvangen en gelezen heb

とある。意味は、今年7月に「villeneve」(フィレネーフエ)から手紙3通を受け取って安心した、というものである。和文手紙の書き出しには、3通の手紙を受け取ったことだけが書かれており、「7月にフィレネーフエ」から受け取ったことは書かれていない。高良斎による追加である。

なぜ、高は追加できたのだろうか。高良斎(1799~1846年)は、阿波国(徳島県)出身の蘭方医で、シーボルト来日以前の1817(文化14)年から長崎に遊学し、鳴滝では塾頭を務めた。彼は、1831(天保2)年5月に長崎から徳島へ帰り、後に大坂で眼科を開業するから⁽¹³⁾、其扇が手紙を出した1830年暮れは長崎にい

た。和文手紙の後半に「直之助さま、りよふ才（良齋）さま、あつき御せわニ」なっているから礼を言ってほしい、とある⁽¹⁴⁾。オランダ内通詞の松村直之助と高良齋は、其扇と「いね」の面倒を見ていたのである。この部分に対応する蘭文手紙は、次のようになっている。

heer naonosuke en heer riosai met zeer groote moeite over alles beschikd

「naonosuke」（直之助）と「riosai」（良齋）はとてもよく面倒を見てくれた、という意味だから、高は自分で自分の記事をそのまま訳している。

オランダ生まれの画家フィレネーフェ（Carl Hubert de Villeneuve 1800~74年）は、1825年、シーボルトが要請した助手として、ドイツ生まれの薬剤師ビュルガー（Heirich Burger 1806~58年）とともに来日していた。彼は、其扇の手紙を乗せたオランダ船に乗船してバタヴィアへ行き、一旦は長崎を離れるが、それまではビュルガーとともに其扇たちの面倒を見ていた。3月のシーボルト手紙には、生活費1000テールはフィレネーフェから其扇へ渡すよう書いた、とある⁽¹⁵⁾。フィレネーフェはシーボルトの指示通りに役目を果たしている。そのことは、1830年12月31日付、出島にいたビュルガーがシーボルトへ送った手紙にある⁽¹⁶⁾。

Schliesslich muss ich Ihnen noch berichten, dass ich gestern met Villeneuve in den Stad gewesen bin wo wir der gute Sonogi die Eintausend Teilen Kontant selbst in Händen gegeben haben.

内容は、前の日、つまり12月30日、フィレネーフェとともに「Eintausend Teilen」（1000テール）を其扇に手渡した、とある。またドイツのボフム大学図書館に、オランダ通詞荒木豊吉のシーボルト宛手紙があり、「デ・フィレネーフェ様から私の父が現金1000テールを受け取り、其扇に渡しましたからご安心ください」とある⁽¹⁷⁾。つまり、1000テール（銀10貫目、約1670万円）の生活費は、

フィレネーフエから荒木豊吉の父（オランダ通詞，荒木八之進）へ，そして其扇へ渡されたことになる。出島のオランダ商館員たちは，日本通貨の金貨銀貨を保持していないから，直接に現金を渡すことはできない。貿易決済を行う長崎会所が介在していたと思われるが，詳しいことは不明である。

さらにビュルガーの手紙には，「いね」が出島で遊んでいること，其扇は3年間結婚しないだろう，とある。

Was Dezima betrifft, so eft alles nach wie vor, Villeneuve bleibt Ihr bewehrter Freunde, und ich habe Compagnieschap mit ihm gemacht. Sonogi habe ich meermalen gesprochen, und mit Ihr sowohl als mit Tsitose und unsre Kinder, verschiedene male nach Mogi Awa u s f gewesen. Die Sonogi spricht Nichts anders als von Ihre grenzenlose Güte gegen Ihr, sie will bienen 3 Jahre noch nicht heirathen, indem sie immer noch eine Hoffnung hegt dass Sie vielleicht zuruckom. Oine ist ein allerliebstes Kind geworden ich sehe Sie von Zeit zu Zeit mit mein kleinen auf Dezima.

〔翻訳〕

出島はすべて以前と相変わらずで，フィレネーフエは信頼できる友人のままです。そして私は彼と協力関係を続けています。其扇とは何度も話をしています。其扇と千歳，そして私たちの子供と一緒に茂木や網場などへ遊びに行っています。其扇はあなたの事ばかり話しています。彼女はいまだにあなたが戻ってくる希望を持っているので，3年間は結婚しないつもりです。「いね (oine)」は本当に可愛らしい子どもになりました。私は「いね」がときどき私の子と出島で遊んでいるのを見かけます。

シーボルトがいなくなった出島において，「いね」はビュルガーと千歳（「萩の枝」）の間に生まれた「アサキチ」と遊んでいる。千歳は寄合町肥前屋抱えの遊女であり，其扇の長姉であった。「アサキチ」の誕生日は，「いね」（文政10年

〈1827〉5月6日)より2ヶ月ほど遅い7月28日⁽¹⁸⁾。2人は同じ年の3歳で従姉妹だった。長崎近郊の漁港・漁村である茂木や網場へ遊びに行っている。

ビュルガーの手紙から、シーボルト帰国後、其扇たちは出島にいたビュルガーなどと頻繁に交流していたことが分かる。シーボルトの手紙がフィレネーフエから其扇へ渡され、それを其扇が高良斎に見せて翻訳してもらった可能性は大きい。だから高は、返事の蘭文手紙の最初にフィレネーフエから手紙を受け取ったことを追記した。さらに彼は、7月に渡されたことも付け加えている。オランダ船2隻の入港は西暦1830年8月初旬であり、和暦では天保1年6月後半に当たる。入港後の作業は貿易品を卸すことから始まるから、(和暦)7月になってシーボルトの手紙が其扇へ渡された、と考えられる。

このように、高良斎は和文手紙をそのまま直訳するのではなく、要領よくまとめている。其扇が仕立ててシーボルトに贈った煙草入れについて、

ik zal aan u moeder een stuk tabaks doosjes en aan u ook een stuk daarvan, waarvan men op het eerste een beeld van lieve oine, en op het laatste twee, die van mij en oine zeer naauwkeurig gekleurd is

〔翻訳〕

お母様へ鼻煙草(嗅ぎ煙草)入れを一つ差し上げます。あなたへも一つ差し上げます。お母様へのは「おいね」の絵、あなたへのは私と「おいね」の絵をとともよく描かせました。

とある。煙草入れを母親とシーボルトに贈ったこと、其扇と「いね」の絵が上手に描かれている、と書かれている。和文手紙にあった「朝夕ながめて自分たちを思い出して欲しい」の部分はカットされている。

おわりに

「くずし字」で書かれた和文手紙には、其扇の想いが込められており、何度も繰り返しがある。彼女の想いがシーボルトにどれほど伝わったか不明ながら、「くずし字」を読めないシーボルトにとって、高良斎が翻訳した蘭文手紙によって、其扇と「いね」が元気に叔父さんの家で暮らしていること、煙草入れ送付のこと、いくつかのプレゼントは届いたことを知ることはできた。ただし、彼が送った生活費（1000テール、銀10貫目、約1670万円）の受け取りについて、高良斎は「een duizend lail」（1000レイル）と書いている。高は、「Tail」（テール）とすべきだったが、「lail」と書き間違っている。「テール」（Tail・Teil）は日本とオランダの貿易取引のための換算単位であり、そのような貨幣があったわけではない。シーボルト自費出版の『NIPPON』のなかに、金1両＝6テール＝12グルデンとある⁽¹⁹⁾。金1両＝銀60目で換算すると、1000テール＝銀10貫目となる。

シーボルトにとって、高が翻訳した其扇の蘭文手紙の他に、ビュルガーや荒木豊吉の手紙が届いているから、生活費が届いたことを知ることはできた。

注

- (1)、(7) 杉本つとむ『西洋人の日本語発見』118頁（オンタイム出版創拓社、1989年）、古田啓「ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン－生涯と業績－」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』57号、2003年）
- (2) アーフケ・ファン＝エーヴァイク「1830年12月、帰国したシーボルトへ其扇が送った最初の手紙」（『鳴滝紀要』29号、2019年）
- (3) 1830～31年『Dagregister（商館長日記）』（ハーグ国立文書館蔵、「日本商館文書群」No：246）
- (4) ドイツの母と伯父に宛てたシーボルト手紙。宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸「フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1825年、1828年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳（補遺2）」（『鳴滝紀要』21号、2011年）
- (5) W.J. ポート「ライデンにおける東アジア研究の由来と発展、1830－1945」（『東アジア文化交渉研究』別冊4号、関西大学、2009年）、高杉志緒・宮崎克則編『シーボルト蒐集和書目録』88頁（八木書店、2015年）
- (6) シーボルトは1830年11月頃にライデンに落ち着く。現在、シーボルトハウスとして公開されているライデンのラーベンブルフ19番地の家は、1832年5月から住み始

- める。それ以前の住所は不明ながら、ホフマンや郭らと同居していたことが、1830年12月21日付、シーボルト→其扇の手紙に書かれている（宮崎克則「1830年12月 帰国したシーボルトが其扇に送った手紙」、『西南学院大学博物館研究紀要』9号、2021年〈予定〉）
- (8) 大井剛「東洋文庫蔵旧ベルリン日本学会シーボルト文献複製の存在様態」（『東洋文庫書報』41号、2010年）
- (9), (10), (11), (15) 石山禎一・宮崎克則「1830年3月 帰国途中のシーボルトが其扇に送った手紙」（『西南学院大学博物館研究紀要』8号、2020年）
- (12) 日独文化協会編『シーボルト関係書翰集』、郁文堂書店、1941年
- (13) 福島義一『高良斎とその時代』73頁（思文閣、1996年）、呉秀三『シーボルト先生－其生涯及ビ功業－』690～695頁（吐鳳堂、1926年）
- (14) アーフケ・ファン＝エーヴァイク「1830年12月、帰国したシーボルトへ其扇が送った最初の手紙」、石山禎一『シーボルトの生涯をめぐる人びと』78頁（長崎文献社、2013年）
- (16) 1830年12月31日付、ピュルガーの手紙（ブランデンシュタイン城博物館蔵、No：B17.Fa.b278）
- (17) 1830年12月21日付、荒木豊吉の手紙（ボフム大学図書館蔵シーボルトコレクション No：1.448.000）、『シーボルト関係書翰集』53頁に翻訳がある。
- (18) 「いね」と「アサキチ」の誕生日は、文政10年『亥年諸事書上控帳 寄合町』（『渡辺文庫』14-29、長崎歴史文化博物館蔵）から分かる。オランダ人との間の妊娠・出産は役所への届け出が必要であった。「いね」の誕生日の記事はすでに拙稿に載せたから、「アサキチ」の記事をあげる。

乍恐口上書

寄合町肥前屋勘助抱遊女

萩の枝

亥貳拾六歳

右之者、去ル酉年々役人阿蘭陀人へんでれき・ひゆるける呼入候処、懐妊仕候ニ付御届申上置候処、今朝銅座跡親佐平方ニ而男子出産仕候段、抱主勘助申出候ニ付、此段以書付御届申上候、以上

亥七月廿八日

乙名 芦刈 印

御

千歳の遊女名は「萩の枝」であり、其扇と同じく親の佐平方で出産している。生まれた男児の名前は、1831年12月1日付、ピュルガーの手紙から確定できる。「私の小さいアサキチ（「Asakits」）の母である千歳（「Zitose」）の死後」とある（野藤妙・海老原温子・リザ エライン ハメケ・宮崎克則「1831年、ピュルガーがシーボルトに出した書簡」、『九州大学総合研究博物館研究報告』11号、2013年）。「アサキチ」が成人したかどうかは不明である。

- (19) 宮崎克則『シーボルト「NIPPON」の書誌学研究』130頁（花乱社、2017年）

1830年12月29日 (和暦11月15日) 付 蘭文手紙

[1] 画像 (フォトシュタット版 東洋文庫蔵)

Antwoort
Op mijnheer Dr von Seboto

Ik ben zeer gereet, nadat ik dit jaar den 7
maand van hier de sellenrode wil mij gescreven
dare brieven ontvingen en gelezen heb. Maar
was de gezegde, dat ik vermits jaar gelukkig te
balatien aangekomen en nu hier gezond bevind;
terwijl ik en een ander hier wil blijven wisten, aber ben
benk ik aan wil met tranen den oog, bedroef
den tijd van de heeren verhooren is, want ik is
koo nake waren met mij bij onspreekelyk wijte op
desinn hoe een paarey samen blijft en helpe te
plaatse hoe gewooste ongeluk door gestaan. Bij
het zien van de helpe nu geschiedens blyff ik ik
dat ik de weder ontmoet en hoe meer onsocht
oens verstand, hoe laderer heket haaren hader,
ja onsoer ook niet dit getrombord, over de zaak
reeds mij belesofde, zal ik immer vergeten. Dit
jaar hebben ik en lute eenen myn voortius vergete,
plaatse, daarom maake ik immer voor ons
hoofpyn, die oorn is hier oprijfte man; doe
myne gebiedenis van de maaker de geduerende
de ja, van de blyf over de ongeluk heken veel
bedroef hude hogen, maar loek hier gesonne hoerste hogen.

hee kan mijre lyste maar vergeten, die dit maal
 zoo veul meer present; en deitens lald, namelijk,
 4 pengelbuis, 1 kruital schokkely, 10 ringgellys, 1 havis
 seld, 1 kan, van het beste onmusbare plaat voor
 mij en vane bygedanken het; ik zal aan de moeder
 een stiek tabaks doosjes en aan de vrok een stiek
 laar van, stuur van men op het eerste een beelde
 liek vane, en op het laatste lode, die van mij en vane
 hier aenschakelen, schikens B, ja oare verson 20 pakjes
 tabak; 1 stiek schuur, die te aan Melidely myre ge,
 viedens; Dus te op een lode, taalikel mynheur, van
 Klauwe jaan ook schrijfe mij and, verduck en der,
 lengt te dit.

BB onder de 13 stukken verschillende Haffon die
 te voor ons toegesonden, heeft het de 11 stukken
 reeds van heer sellenose vassange vane, 2 stukken
 Lafachiles nu, niet over het ophange het te van heer
 sellenose mondeling hoorde, heer verson te ke en heer
 verson met heer groote muette over alles het ophide.

Viel het vana e
 ingehou lode

Joon
 van de vana e

Joonje

Nagelstijp

den 16^{ten} Jan. japansche 11 maan.

[2] 翻刻

Antwoord
Op mijnheer Dr von Siebold

Ik ben zeer gerunt, nadat ik dit jaar den 7
maand van heer de villeneve uwEl mij geschrevene
drie brieven ontvangend en gelezen heb, waar
in u gezegt, dat ik verredene jaar gelukkig te
batavia aangekomen en nu zeer gezond ben,
terwijl ik en oine zeer wel blijven leven, jeder dag
denk ik aan uwEl met tranenden oog, zedert
den tijd van u hier van vertroken is; want u is
zoo veele jaaren met mij bij onsprekelijk wijze op
desima zoo een paarig zamen blijft en zelfs te
plaats zoo grootste ongeluk doorgestaan. Bij
het zien van u zelfs mij geschreven briefje duk ik
dat ik u weder ontmoet, en hoe meer ontwikkeld
oines verstand, hoe lastiger zoekt haaren hader,
ja orson ook niet uitgezonderd, onder de zaak,
reeds mij beloofde, zal ik nimmer vergeten. Dit
jaar hebben ik en lieve oine vroeg oomhuis verge-
plaatst, daarom maake u nimmer voor ons
hartpijn, die oom is zeer opregte man; doe
mijne gebiedenis van u moeder, die geduurende
u japan verblijf over u ongeluk zeker veel
bedroefd zou zijn, maar toch zeer gezond hoort te zijn,

hoe kan mijne lieve man vergeten, die dit maal
zoo veele mooi present; een duizend lail, namelijk,
7 vingerhoud, 1 kristal schoteltje, 10 ringgeltjes, 7 haar
siel, 1 kan, van zoo verre onmeetbaare plaats voor
mij en oine toegezonden hed; ik zal aan u moeder

een stuk tabaks doosjes en aan u ook een stuk daarvan, waarvan men op het eerste eene beeld van lieve oine, en op het laatste twee, die van mij en oine zeer naauwkeurig gekleurd is, ja aan orson 20 pakjes tabak; 1 stuk schoon, doe u aan Weleveu mijne gebiedenis; Pas u op en leve vaal wel mijnheer, aanstaande jaar ook schrijve mij eens, verzoek en verlangt u dit.

NB onder de 13 stukken verschillende stoffen, die u voor ons toegezonden heeft, heb ik 10 stukken reeds van heer villeneve ontvangd, maar 3 stukken lafacheles nog niet, over het overige zal u van heer villeneve mondeling hooren, heer naonosuke en heer riosai met zeer groote moeite over alles beschikd.

veel wel bewaare

mijnheer leve

Door

uwe trouwe vrouw

Sonogie

Nagasakje

den 15 van japansche 11 maand

〔3〕 翻訳

返事

シーボルト博士へ

今年7月、フィレネーフェさんから私宛のあなたの手紙3通を受け取り、あなたが無事にバタヴィアに到着され、とてもお元気でいらっしゃるの聞いて安心しました。私も「おいね」も無事に暮らしています。あなたが発送された日から、毎日あなたと一緒に出島で暮らしたことや大きな災難に遭われたことを考えて泣いています。

あなたの手紙を見ると、あなたに再びお会いしたような気がします。「おいね」は利口になりました。お父さんのことを熱心に尋ね、またオルソンのことも忘れていません。以前、約束したことは決して忘れません。今年早々、私と「おいね」は叔父の家に移りましたので、心配しないでください。彼はとても良い人です。あなたが日本滞在中に不幸な事故に遭ったことを心配されているお母様によろしく伝えてください。

今回、たくさんの美しい贈り物、1000レイル（高良斎は「Tail」とすべきだったが、「Iai」と書き間違い）、指輪7、皿1、指ぬき10、髪飾り7、櫛1をはるばる遠いところから送ってくださったあなたのことは決して忘れません。お母様へ鼻煙草（嗅ぎ煙草）入れを一つ差し上げます。あなたへも一つ差し上げます。お母様へのは「おいね」の絵、あなたへのは私と「おいね」の絵をととてもよく描かせました。また、オルソンへ煙草20巻と靴1足を送ります。「Weleveu」（和文手紙の「ひがとへん」、1830年3月4日付シーボルト手紙の「Wite viu」と同一人物と思われるが、詳細は不明）によろしくお伝えください。お体に気をつけてお過ごしください。来年もまたお手紙をください。お願いします。

追伸 私達にお送りくださった種々の布13反の内、10反はすでにフィレネーフェさんから受け取りましたが、3反はまだです。その他のことはフィレネーフェさんから聞いてください。松村直之助さんと高良齋さんはとてもよく面倒を見てくれます。

お体を大切にしてください

あなたの忠実なる妻

其扇

長崎

日本暦11月15日